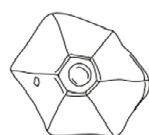




六地蔵とは、「地獄・畜生・飢餓・修羅・人間・天人」の六道にある、民衆を救済するという六体の地蔵菩薩のことです。その六体を刻んだ石造物のことを六地蔵と呼んでいます。室町時代からある地蔵信仰の拡大によって、人々はこの六地蔵をいろいろな形の石造物であらわしました。熊本県内では主に六角形の石に刻み、塔に仕立てた「六地蔵石幢」という形で存在する場合が多く、ほかにも「板碑」や「石仏」などがあります。六地蔵は往還の出入口や三差路に多く建立され、道標的役割も果たし、人々の生活に密着し続けた石造物と言えます。県内には約400基あるとされ、市内には25の六地蔵があり、うち石幢が22基、板碑が2基、石仏が6体並んだものが1組です。これらは後世に寄せ集められたもの、欠損したものもあるため、ここでは主に市指定や登録文化財になっている六地蔵、保存状態が良いものを紹介します。

六地蔵を見る

～肥後型といわれる六地蔵石幢～



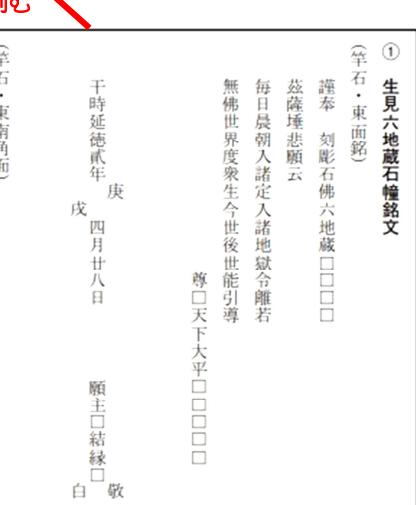
笠も六角形



六道(天道・人道・修羅道・飢餓道・畜生道・地獄道)

各世界6体の地蔵菩薩が6面に！

「生見の六地蔵石幢」展開図



延徳2年(1490)年建立。願主として計6人の名と共に「永劫に苦しむ衆生(人々)を救済するためにこの世であれ、あの世であれ正しく導く」という内容を刻む。



付近にあったと考えられる五輪塔を笠として載せてある。

後世に補修や追加があるのも

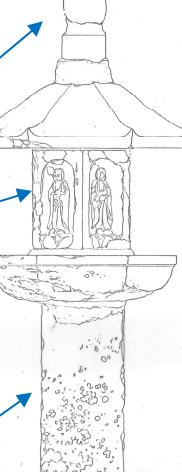
地域で守られてきた証し！

江戸期の後補か？

室町時代

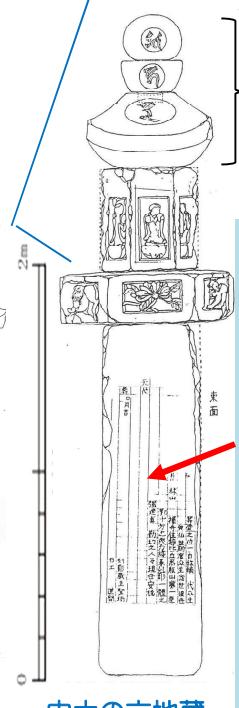
銘文あるが風化が著しく判読困難

上の六地蔵



中土の六地蔵

(高さ2.34m)



中土の六地蔵

(高さ2.65m)

幢身には銘文があり、数人の僧名と共に、「刻彫主聖瑞・石工道開」と刻まれ、「次の世には阿弥陀仏がおられる淨土に生まれる」という願いが記されており、室町時代中期頃に造立されたと考えられています。

前川清一氏は、肥後型といわれる六地蔵石幢を「初期・中期・後期」に分類。県内で最古とされるのは、熊本城・不開門そばにある元安元年(1444)年銘の石幢で、これから明応年間までのものを初期、文亜元年～天正15年までを中期、天正16年以降のものを後期と分類している。また、形状は初期が細長型で、中期になると「すんぐり型」と変化します。玉名の六地蔵も、スリムなタイプと、すんぐりタイプがありますが、後世に追加・補修されたものも多いため、注意が必要です。よって、銘文に建立年があるものは時期特定が可能になります。

玉名市内の六地蔵

～地域を見守り、信仰されてきた証し～

村へ侵入する悪霊を防ぐ
と考えられていたため、
交差点などが多いぞ！

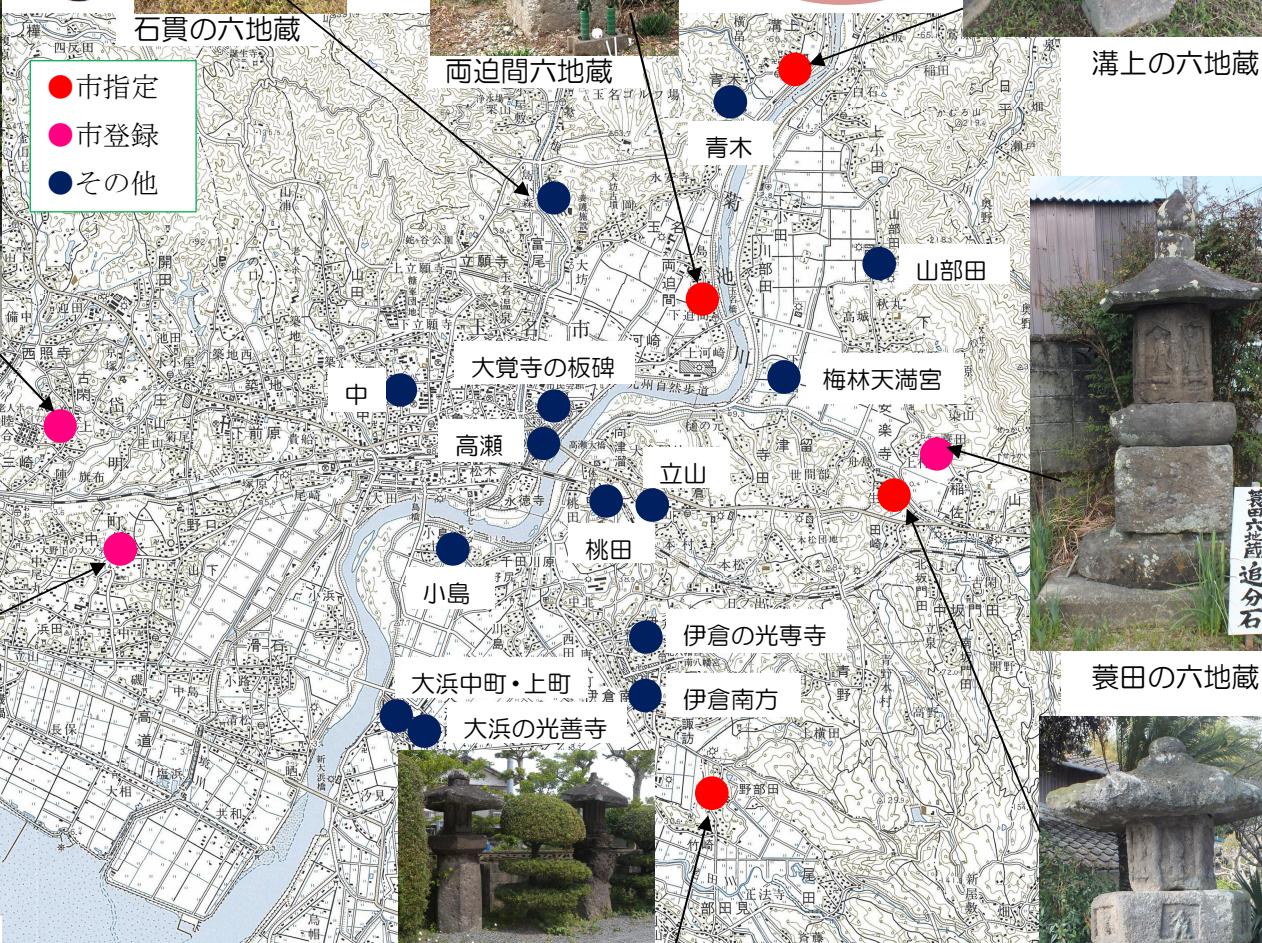


近くで見る 圧巻！



高さ約3.5m
あり、県内でも
最大規模
の大きさ！

延徳三年(1491)
の銘があり、市内で
は古い宝地蔵。

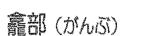


六地蔵石幢の名称

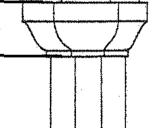
宝珠 (ほうじゅ)



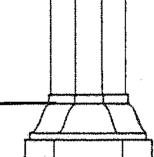
笠 (かさ)



中台 (ちゅうだい)



幢身 (どうしん)



基礎 (九)

穴があけられている痕跡は、
地蔵信仰の一つで、病を防ぐ
ために石粉を薬としたため
で、他でもよくあります。



部分拡大



天水町の六地蔵板碑（野部田）

市内の六地蔵は、左図のような石幢タイプが多いですが、天水町野部田にあるのは板碑タイプで、六地蔵が線刻されています。文明17年（1485）の建立で、高さは2.3mもあります。

線刻された六地蔵